



# ダムとつきあって半世紀

社団法人 淡水生物研究所 所長 **森下 郁子**

環境が加わったことでダムが新たな時代を迎えつつあると痛切に感じる。これからの50年人工構造物であるダムをどう活用し管理していくか。

それには土木的考え方と環境を担う生物学的な価値観のずれを認識することではないか。環境には明確な目標が希薄である。それは環境は時間とともに変化するからである。生活の場である環境は現状の変化が少ないことがいいことで、この普通のもので変わりにくく存在していることの重要性は、よりよいものを造りだすことが使命の土木の技術者に理解してもらおうのが難しい。

ダムの貯水池で未知の生物現象が発生すると生物学者に現象の解明が問われる。水質や水の流れ方が変化して起きた赤潮やアオコに対しては、生物学からの提案を受けて土木学的な研究を積み重ね、フェンスを張ったりなどの対策を施してきた。ブラックバスなどの外来種が世論の悪者になり法的にも放流が禁止されると、ダム湖でも駆除の施策がとられるようになった。放流は禁止だが駆除しなければならぬのは深読みである。最も必要なのは、ダムをどんな構造にしておけば赤潮やアオコが発生しにくくなるのか、外来種が侵入しにくく勢力を広げにくい構造とはどうなのか、についての知識を構築し土木技術を開発するにあたり、生態系のしくみについて真摯に受け止め生かしていくことであろう。これまで行ってきた単に駆除することで解決するのではなく、いってみれば応用生態学の知識をもとにした土木の技術で対応することが先決である。

治水や利水事業は目的がはっきりしているが、環境事業はどうあったらいいかをつめることは難しい。なぜならこうあるべきとの思い込みだけで将来をみすえた目標をもたずに進めてることがままあるからである。そのためとりあえず世論がよかれとしている方向に飛びつく傾向に

ある。なぜ外来種が悪いのか、在来種なら放置してもいいのか。それらの答えをだしてから、これなら現状のままでもよい、と判断して土木的な処置を施さない勇気をもつことが大切であることに気づいて欲しい。実は、今必要なのは、これからは現状のモニタリングを積み重ねて将来を見すえ、最も経済的で環境の劣悪化を防ぐ方策を検討することではないか。

ミレニアム計画では生態系サービスの考え方が環境の新たな方向性を示しはじめている。生態系サービスの考え方は、自然から受ける恩恵を経済的に評価し、開発によって損失する生態系の価値を認識する。生態系が私達に施すサービスは無償ではなく、実は有償であることを指摘している。思い込みで環境に改変を加えることで生態系サービスへの代償が高くなり、支払い不能になりたくないものである。

